



Title	留学生との英語学習プログラム“Project HELP!”の実践報告：9年間の取り組み事例とアンケート結果の分析を中心に
Author(s)	中野, 遼子; 林, 貴哉; 垣塚, 保子
Citation	多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2024, 28, p. 55-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/94690
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

留学生との英語学習プログラム“Project HELP!”の実践報告

— 9年間の取り組み事例とアンケート結果の分析を中心に —

中野 遼子^{*}・林 貴哉[†]・垣塚 保子[‡]

要 旨

本稿は、2015年度より大阪大学国際教育交流センター主催で開始した「留学生との英語学習プログラム“Project HELP!”」（以下、HELP!）について、その実践報告を行うとともに、参加者対象に実施したアンケート結果を分析して、HELP!の教育的効果を明らかにすることを目的としている。具体的には、HELP!の9年間のデータをまとめ、留学生（メンター）と英語学習者（メンティー）のマッチングのルールについて整理する。次に、これまでのアンケート結果を分析することで、メンターとメンティーにそれぞれどのような学びがあったのかを明らかにする。HELP!は2023年度で終了することになったが、最終的には、HELP!のような英語学習プログラムを持続可能なものにするために考慮すべき点を提示し、プログラムの発展につなげたい。

【キーワード】 英語学習、留学生、メンタリング、タンデム、マッチング

1 はじめに

大阪大学国際教育交流センターは、2015年度から留学生との英語学習プログラム“Project HELP!”（Harmonized English Language Program, 以下、HELP!）を実施している。HELP!は、英語学習者（メンティー）と英語が堪能な留学生（メンター）をマッチングし、メンティーの International English Language Testing System（英語力証明試験。以下、IELTS）のスコア向上を目指す3ヶ月間の英語メンタリング学習プログラムである。

本稿では、これまでのHELP!のデータを整理し、メンティーとメンター対象のアンケート結果を分析することで、HELP!の9年間の総括を行う。その際、9年間の取り組みから得られたマッチングルールや今後の学生交流の取り組みにとって参考になることを提示する。

2 Project HELP! とは

2-1 HELP! の概要

HELP!の詳細については、歳岡（2016a; 2016b）や、中野・近藤（2019）を参照いただくとして、本項では、簡単な説明にとどめる。HELP!は、3ヶ月間で90分×8回、計12時間の英語メンタリング学習プログラムであり、年2回実施されている。メンタリング期間中は、マッチングされたメンティーとメンターが、特にスピーキングとライティングに焦点を当てて、メンティーのスコア向上（本学の交換留学派遣に必要なIELTS 6.0以上）を目指す。本稿におけるメンタリングとは、メンターがメンティーに「英語を教える」のではなく、「目標とするIELTSスコアが獲得できるよう支援し、英語力向上につながる行為・行動を導くこと」である。さらに、HELP!は、プリティッシュ・カOUNシル（以下、BC）およ

* 東北大学歯学研究科特任講師

† 武庫川女子大学文学部講師

‡ 元大阪大学国際教育交流センター事務補佐員 Project HELP! 担当

び日本英語検定協会（以下、英検協会）の協力のもと、オリエンテーション時にメンターへのIELTS指導研修やメンティーへのIELTS試験（スピーキングを除く）も実施している。

2020年度のパンデミック時期は、オンラインによりプログラムを実施したが、国内学生と留学生の交流を推進するために、原則的には対面でのメンタリングをルールとしている。

2-2 HELP! の参加者数について

これまでの応募者・参加者については、まず、第1期から第18期までの応募総数はメンターが376名、メンティーが657名で、421ペアをマッチングすることができた（表1）。

第4期以降は、每期30組以上のペアをマッチングしていたが、2020年度（第11期）以降、パンデミックの影響により、メンターの応募が減少し、ペア数が每期20組前後に落ち込んだ。しかし、メンティーの応募者数は増加傾向にあったため、応募者の半数近くがマッチングされない状況が続いた。

表1 HELP! の参加者数（カッコ内は応募者数）

時期	メンター	メンティー	ペア数
第1期（2015後）	11（14）	11（32）	11
第2期（追加募集）	6（8）	7（22）	7
第3期（2016前）	22（24）	22（41）	22
第4期（2016後）	29（37）	33（47）	33
第5期（2017春夏）	16（16）	30（45）	30
第6期（2017秋冬）	23（24）	37（42）	37
第7期（2018春夏）	35（36）	35（38）	35
第8期（2018秋冬）	25（26）	31（31）	31
第9期（2019春夏）	24（29）	34（39）	34
第10期（2019秋冬）	23（26）	34（45）	34
第11期（2020春夏）	17（17）	23（48）	23
第12期（2020秋冬）	10（12）	14（25）	14
第13期（2021春夏）	23（23）	26（50）	26
第14期（2021秋冬）	14（14）	15（18）	15
第15期（2022春夏）	11（11）	11（21）	11
第16期（2022秋冬）	19（19）	20（35）	20
第17期（2023春夏）	10（15）	15（34）	15
第18期（2023秋冬）	18（25）	23（44）	23
合計	336（376）	421（657）	421

3 調査方法

本稿では、筆者らが実施した第5期から第16期までの終了後アンケート結果について記述する。アンケート回答者の内訳は、表2の通りである。メンターは計149名、メンティーは計272名である。第5期と第6期のメンター回答者が空欄となっているのは、メンター対象の終了後アンケートが第7期より開始されたためである。

質問内容は、主にHELP! における英語学習とその満足度、そして、メンター・メンティーの交流について尋ねた。

表2 終了後アンケートの回答者数

時期	メンター	メンティー
第5期（2017春夏）	—	26
第6期（2017秋冬）	—	30
第7期（2018春夏）	20	30
第8期（2018秋冬）	12	26
第9期（2019春夏）	17	30
第10期（2019秋冬）	20	33
第11期（2020春夏）	16	23
第12期（2020秋冬）	8	15
第13期（2021春夏）	19	15
第14期（2021秋冬）	12	14
第15期（2022春夏）	11	11
第16期（2022秋冬）	14	19
合計	149	272

4 結果

本項では終了後アンケートの結果について述べる。質問項目数については、メンター用は全16問、メンティー用は全17問である。本稿では、紙幅の都合上、特に重要だと思われる質問結果のみを考察する。

4-1 メンターの満足度

本項では、メンターがHELP! へ応募した理由（図1）から、HELP! の満足度（図2）、そしてHELP! を通して何を獲得したか（図3）、に関する回答結果を見ていく。

4-1-1 HELP! への応募理由

HELP! への応募理由については、「英語を教えることに興味がある」、「日本人学生との交流に興味がある」、「HELP! の資格取得に興味がある」の3つの回答から、1番目と2番目の理由を選んでもらった。1番目の理由を2点、2番目の理由を1点とし、点数化したところ、「日本人学生との交流に興味がある」(196点)が最も多かった(図1)。続いて、「英語を教えることに興味がある」(130)、「HELP! の資格取得に興味がある」(38)と続いている。メンターにとって、HELP! は、日本人学生と交流する機会として、考えられていたといえる。

4-1-2 満足度

メンターのHELP! の満足度を聞いたところ、「とても満足」(66%)と「満足」(31%)が多く、3%が「あまり満足していない」と回答していた(図2)。ここから、HELP! は、メンター回答者の97%が満足しており、メンターにとって、満足度の高いプログラムだったといえる。

4-1-3 HELP! を通して獲得したこと

メンターが、HELP! を通して獲得したことについて、10項目の中から選択してもらい、1番目に重要、2番目に重要、そのほかに重要なもの(複数回答)として、順位づけしてもらった。1番目に重要な項目は3点、2番目は2点、その他は1点として点数化した結果、図3のような結果となった。

まず、メンターが獲得したことで1番重要だと感じたことは、「英語を教える自信がついた」(231点)であった。次に、「メンティーとたくさん交流する機会があったこと」(194)、「日本や他国の文化について理解が深まった」(162)、「日本社会での自分の役割を感じることができた」(133)、「IELTSについての理解が深まった」(131)と続いている。英語を教える自信や、メンティーとの交流機会や異文化理解の機会の提供だけでなく、「日本社会での自身の役割を感じられた」ことも上位に入っているということは、HELP! が、留学生に社会的役割を提供し、精神的なサポートにもなっていたといえることができるだろう。

また、HELP! の当初の目的であった「母国の大学で奨学金を得るためにProject HELP! の修了証の獲得」(14)が、最下位であったことは、少し驚きであった。おそらく、HELP! の修了証を奨学金獲得に適

用できる大学がそれほど多くはないからだと予想できる。そして、「日本語の上達」(24)も順位が低かった。当初は、ベアになった阪大生から、お礼として日本語のサポートを受けることを想定していたが、あまり実現していない様子がうかがえる。ここから、多くのメンターが、HELP! の修了証も日本語の上達も重要視せずに、ほとんどボランティアで阪大生のメンタリング英語学習に従事していたといえる。これまでに、メンティーと比較してメンターの負担の方が大きいという声もあり、この点については、タンドム学習などの仕組みを取り入れて、メンターとメンティーとの互恵的な関係を構築する工夫の必要があると思われる。

4-2 メンティーの満足度

本項では、HELP! がメンティーの英語学習や異文化理解に役立ったか(図4、図5)、メンタリング英語学習とこれまでの英語学習との相違点(図6)、メンタリング英語学習を通して獲得したこと(図7)、に関する回答結果を見ていく。

4-2-1 HELP! がメンティーにとって役に立ったか?

まず、HELP! がメンティーの英語学習に役に立ったか、という質問については、「大変役に立った」(86%)、「やや役に立った」(13%)という回答結果となり、計97%が「役に立った」と回答している(図4)。

異文化理解に役に立ったか、については図5に示す。HELP! が、メンティーの異文化理解に「大変役に立った」(70%)、「やや役に立った」(21%)とメンティーが回答しており、計91%が「役に立った」と考えていた。

以上のことから、HELP! は、大多数のメンティーの英語学習と異文化理解に役に立っており、メンターと同様に、メンティーにとっても満足度の高いプログラムであるといえる。

4-2-2 HELP! とこれまでの英語学習方法との相違点

次に、メンタリング英語学習が従来の英語学習とどのように違うのかを5つの項目から選択してもらい、当てはまる回答を複数選んでもらった。その結果、「メンタリングでは、相手がいるので英語学習へのモチベーションが上がる」(204名)が最も多く選択された(図6)。続いて、「教科書ベースの学習よ

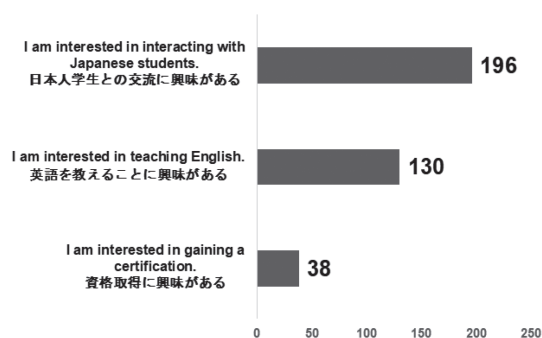


図1 メンターのHELP! 応募理由

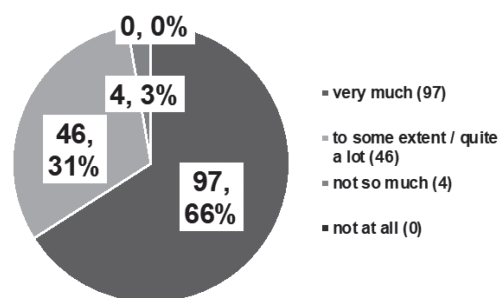


図2 メンターの満足度

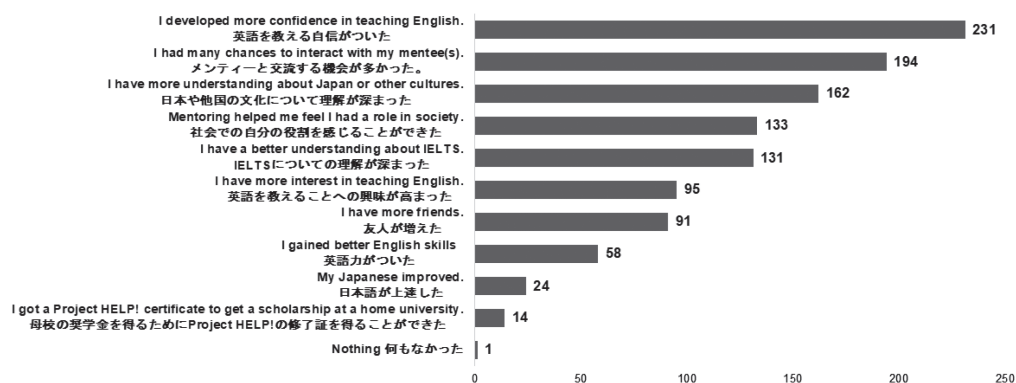


図3 メンターがHELP!を通して獲得したこと

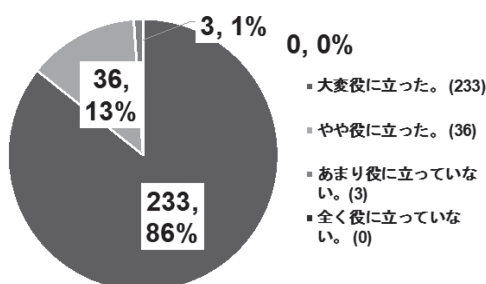


図4 HELP! がメンティーの英語学習に役立ったか？

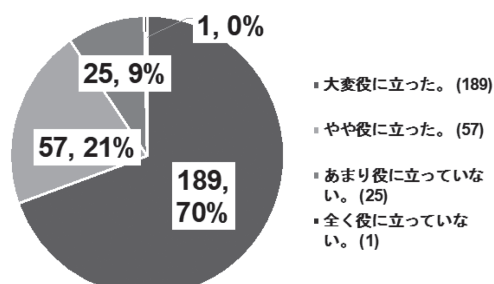


図5 HELP! がメンティーの異文化理解に役立ったか？

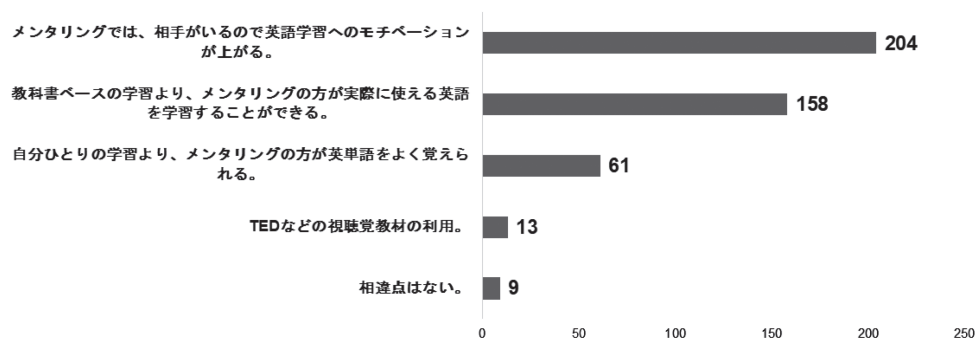


図6 HELP! とこれまでの英語学習方法との相違点

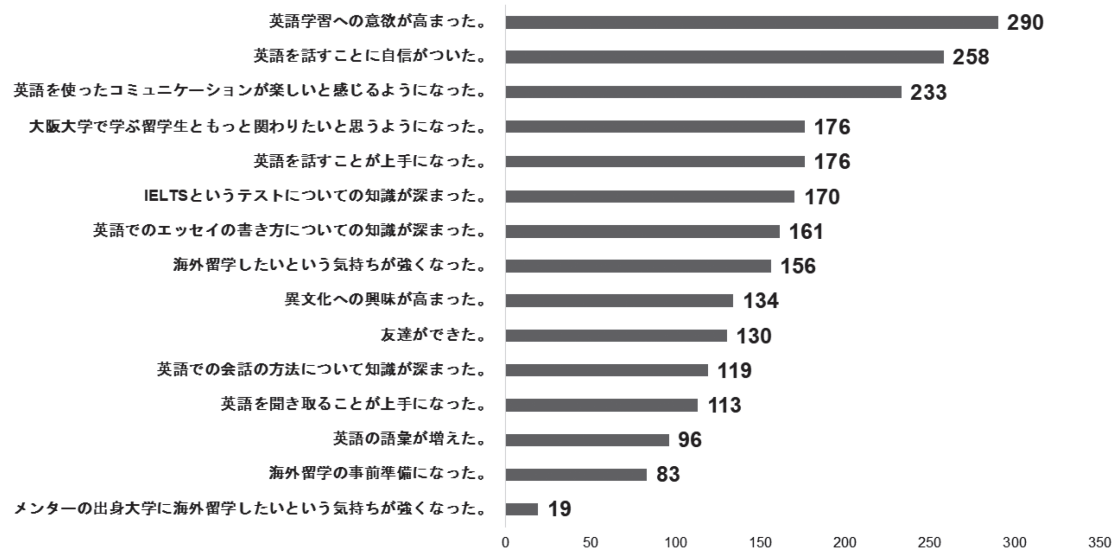


図7 メンティーがメンタリング英語学習を通して獲得したこと

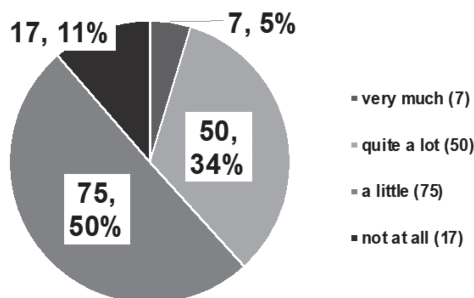


図8 メンティーとの交流機会

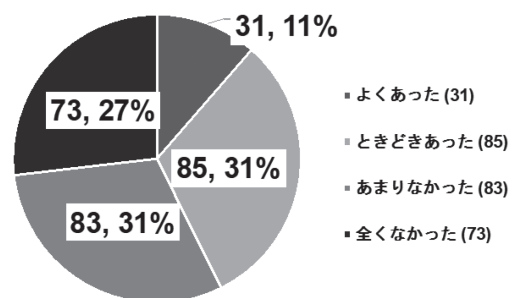


図9 メンターとの交流機会

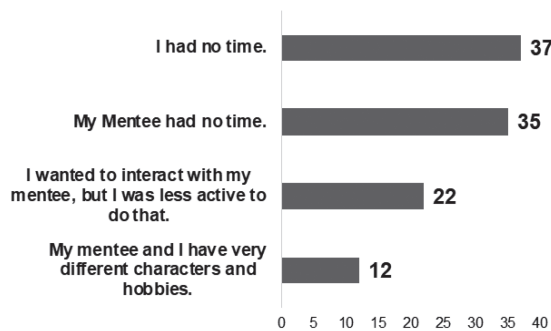


図10 メンティーとの交流機会が少なかった理由

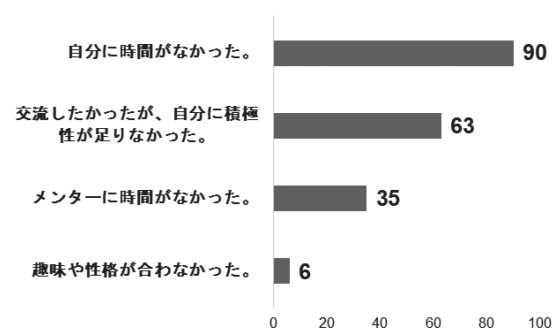


図11 メンターとの交流機会が少なかった理由

り、メンタリングの方が実際に使える英語を学習することができる」(158)、「自分ひとりの学習より、メンタリングの方が英単語をよく覚えられる」(61)、「TEDなどの視聴覚教材の利用」(13)、「相違点はない」(9)という結果となっている。

メンタリング英語学習は、相手がいることで、モチベーションの向上が見られ、実践的な英語を学習できることが特徴であるといえる。さらに、実際に英語を使うことで英単語をよく覚えられると感じるメンティーもいた。ここから、HELP! が、メンティーにとって従来とは異なる新しい英語学習の機会を提供したといえる。

4-2-3 メンタリング英語学習を通して獲得したこと

メンタリング英語学習を通して獲得したことについて、15項目の中から選択してもらい、1番重要、2番目に重要、その他(複数回答)と順位付けしてもらい点数化した。その結果、「英語学習への意欲が高まった」(290点)が最もメンティーにとって重要な項目であった。そして、「英語を話すことに自信がついた」(258)、「英語を使ったコミュニケーションが楽しいと感じるようになった」(233)、「英語を話すことが上手になった」(176)、「大阪大学で学ぶ留学生ともっと関わりたいと思うようになった」(176)、と続いている。全体的には、どの項目も僅差であるが、上位6項目については英語学習意欲の向上のほかに、「話すこと」や「コミュニケーション」等、スピーキング力関連の項目が多い。ここから、メンティーは、メンタリング学習にスピーキング力の向上を最も期待していたといえる。また、メンティーは、英語力の向上のほかに、留学生との交流も重視していたことが分かり、マッチングの重要性も示されたといえる。

4-3 HELP! 参加者の交流

本項では、参加者間の交流に関する質問の回答結果を述べる。メンターとメンティーの双方を対象に、「メンタリング中にメンター／メンティーと交流する機会があったか」(図8、図9)や、交流機会が少なかった理由(図10、図11)について尋ねた。

4-3-1 HELP! 参加者のメンタリング外での交流頻度

HELP! 参加者がメンタリング以外で交流機会があるかについて、メンターとメンティーの双方に質問

した。その結果、メンターは、「よくあった」(5%)、「ときどきあった」(34%)で、計39%であった。メンティーは、「よくあった」(11%)、「ときどきあった」(31%)で、計42%の回答があった。HELP! のオリエンテーションでは、「時間があればできるだけ交流するように」とアナウンスしているが、メンタリング外で交流したのは、ペア全体の40%程度にとどまった。

4-3-2 交流が少なかった理由

上記の質問で、メンタリング以外での交流は少ない、と回答した約60%に、交流が少なかった理由を聞いた。その結果、まず、メンターは、「自分に時間がなかった」(37名)、「メンターに時間がなかった」(35)、「交流したかったが、自分に積極性が足りなかった」(22)、「趣味や性格が合わなかった」(12)という結果となった。一方、メンティーは、「自分に時間がなかった」(90名)が最も多く、メンターと同じ回答結果であった。その後、「交流したかったが、自分に積極性が足りなかった」(63)「メンターに時間がなかった」(35)、「趣味や性格が合わなかった」(6)と続いている。

メンターもメンティーも互いに「自分に時間がなかった」ことが要因であったという回答が最も多かったが、メンターの次の理由が「メンティーに時間がなかった」であった。そのため、阪大生が忙しかったために、メンタリング外の交流の時間がなかなか取れなかった現状がうかがえる。また、メンティーは、「交流したかったが、自分に積極性が足りなかった」という回答も多かった。交流が多かったと回答したメンターやメンティーは、一緒に食事に行ったり、関西の観光地に出かけたりと、昼休みや休日に様々な交流をしており、ペアによって交流頻度が全く異なるようである。今後、メンタリング外の交流を促進するために効果的な対応策を考える必要があるだろう。

5 9年間のHELP! 実践から得たもの

以上、アンケートの結果から、HELP! は参加者の満足度がかなり高いプログラムであることがわかった。特に、メンターにとっては「英語教授法の獲得」と「阪大生との交流」を、メンティーにとっては「スピーキング力」や「コミュニケーション力の向上」

と、「留学生との交流」を重視してHELP!に参加していることが明らかとなった。

2015年度から9年間のHELP!の実践を通して、最も工夫したことは、ペアのマッチングであった。本項では、マッチングの重要性や工夫したこと、そして、アンケートから見えてきたことについて述べる。

5-1 マッチングの際に考慮する点

HELP!の実践で最も力を入れたことは、メンターとメンティーのマッチングである。できるだけ公平に、なるべくメンタリングを必要としているメンティーに、ペアとの英語学習を持続できるよう、「HELP! マッチングの際に考慮する点」を考えた（図12）。

2021/4/10 作成、2021/10/27 更新

HELP!メンティー選考とマッチングの際に、考慮する点

HELP!コーディネーターは、メンティーのエッセイを事前にしっかり読んでおく。

＜必須項目＞

1. 交換留学を希望しており、そのためにIELTS受験を必要としている。
2. IELTSスコア、IELTS6.0～6.5を目指している。
3. 時間割と場所（キャンパス）がメンターとマッチする。
4. 2人担当のメンターには、英語レベルが同等のメンティーをつける。
5. （条件が同じ場合）元メンティーより、初参加の学生を優先する。
6. （条件が同じ場合）過去に応募して、不採用だった学生を優先する。
7. （条件が同じ場合）
春夏学期：1回生より、①2～3回生、②4回生以上を優先する。（応募が迫っているため）
秋冬学期：1回生も積極的に選考する。（交換留学応募の準備のため）
8. （条件が同じ場合）意欲の高い学生を優先する（ミニ説明会に参加、留学相談に参加）

＜今後のマッチング手順＞

1. 書類不備の学生は、補欠リストへ。
2. 「語学学習」のみ希望の学生は補欠リストへ。
3. 「交換留学希望」を明記しているメンティーを選ぶ。（それ以外は暫定Boxへ）
4. 語学スコアを確認（高すぎるスコアの学生は暫定Boxへ）
5. 2回目の学生は暫定Boxへ。
6. メンターと「交換留学希望」学生のマッチング（時間割・場所）。
※どうしても条件（時間割・場所、対面、英語ネイティブ等）が合わない「交換留学希望」学生は暫定Boxへ。
7. 「交換留学希望」の後、「海外留学・院進学」希望学生（留学希望大学欄に記入があるか要確認）をマッチング（時間割・場所）。
8. 暫定Boxの学生をマッチング。
9. 上記を終えてもメンターに余裕があれば、補欠リストの学生をマッチング。

＜良いマッチングのために考慮すべき点＞

（ペアの相性が悪いと、ペア解消の原因となるため考慮が必要。）

1. メンティーが留学を希望する国と、メンターの出身地
 2. 専攻
 3. 趣味
 4. 学年（学部生か、院生か）学年が離れているとペアワークがやりづらくなる。
 5. メンティーが留学生の場合は、2人持ってくれるメンターとマッチングする（日本人学生との交流を期待しているメンターが多いため）
- 今後、マルチリンガルプラザとの差別化を図る。

図12 HELP! マッチングの際に考慮すること

まず、メンティーを公平に選考する基準を定めた。HELP! で最も重要な点は、①交換留学を希望しており、そのためにIELTS受験を必要としていることと、②IELTS6.0～6.5を目指していることである。ただ、HELP! はメンタリングだけでなく、ペア同士の交流も期待しているため、「語学学習」のみ希望の応募者よりは、留学生との交流意欲のある学生を優先するようにしていた。そして、③時間割と場所（キャンパス）がメンターとマッチすることは、メンタリングを持続する上で最も重要な点である。次に、④二人担当可能なメンターには、英語レベルが同等のメンティーをつけることをメンターからのリクエストにより追加した。英語レベルが異なるメンティーを担当した場合、メンタリングの準備時間が2倍かかるため、メンターの負担軽減のためにも考慮すべき点である。その後の、「条件が同じ場合」の選考基準は、交換留学の応募時期等を考慮に入れて、作成した。マッチング手順については、恣意的にならないようにするため、暫定Boxと補欠リストを取り入れた。

次に、ペアの解消を避けるために、ペア同士の相性を重視する「良いマッチングのために考慮すべき点」をまとめた。これは、中野（2016）の、タンデム学習による交換留生活への影響の事例を参考にして作成した。ここでは、言語学習パートナーとの相性が良いと、留生活が充実するという事例を述べているが、マッチングで最も重視する点は、メンターとメンティーのスケジュールである。ここが一致していないと、メンタリングが成り立たない。

そして次に、1) メンティーが留学を希望する国とメンターの出身地、2) 専攻、3) 趣味、4) 学年（学部生か、院生か）の順に重要である。特に、学年については、学年が離れていると話題や求められる英語力に差が出てペアワークがやりづらくなる傾向があるため、考慮が必要である。そして、5) メンティーが留学生の場合は、2人持ってくれるメンターとマッチングする、という工夫もしていた。その理由は、日本人学生との交流を期待しているメンターが多いことと、留学生メンティーもメンターを通して日本人学生との交流が可能になるためである。

以上が、マッチングやメンティー選考の際に考慮する点である。マッチングは、メンターの留学満足度や、メンティーの英語学習の向上に強く影響するため、同様のプログラムを実施する際は、上記の基準や手順を考慮に入れることが重要だと考える。

5-2 HELP! 参加者の交流の難しさ

アンケートの結果から、メンタリング外で交流できたペアは、全体の40%程度であることがわかった。多くのメンターが、日本人学生との交流をHELP! への参加理由として挙げているが、メンタリング外での交流は簡単ではないといえる。以前から、「このプロジェクト参加者限定の対面イベントがあればさらに交流が深まると思います」といった記述回答が多くあり、筆者らもHELP! 参加者対象のイベントを月1回のペースで開催したこともあったが、結局参加者はほとんどいなかった。8回のメンタリングの機会はあるが、60%のペアがそれ以上の交流を持たなかったことは少し残念である。

5-3 アンケートから見たHELP! の特徴

HELP! 参加者がプログラム参加を通して獲得したことに関する質問で、メンターは、「英語を教える自信がついた」（231点）、「メンティーと交流する機会が多かった」（194）、「日本や他国の文化について理解が深まった」（162）となっており、英語教授法以外に、メンティーとの交流や異文化理解の深まりを挙げている。一方、メンティーは、「英語学習への意欲が高まった」（290点）、「英語を話すことに自信がついた」（258）、「英語を使ったコミュニケーションが楽しいと感じるようになった」（233）など、英語学習に関するものが上位を占めている。ここから、メンターとメンティーでは参加目的が異なることがわかる。

次に、メンターは英語教授への自信の獲得、メンティーは英語学習への意欲の高まりを最も重要なこととして挙げていることから、HELP! は、「英語学習」の効果がかなり高いプログラムであるといえる。その理由としては、BCと英検協会の協力が大きいと思われる。この2機関のおかげで、HELP! オリエンテーションの際に、メンターには本格的なIELTS指導法が教授され、メンティーは実際にIELTSの試験を受験することができた。さらに、メンティーは8回のメンタリング学習終了後にIELTSの受験が義務化されている。これは、他の言語プログラムやタンデム学習にはない特徴であり、大学のような教育機関でしか実施できないプログラムであるといえる。筆者自身、HELP! の記述回答には、メンター・メンティーと交流できた喜びの声が多いため、学生同士の交流がHELP! の最も大きな成果と思い込んでいた

が、アンケート結果より、参加者は「英語学習」への期待が高いことがわかった。ただし、IELTS 指導研修の費用や、学生の IELTS 受験とその費用負担の義務等、金銭的な負担が大きいことも事実である。今後、HELP! のようなメンタリング英語学習プログラムを持続可能なものにするためには、①運営費の獲得、②メンターの負担軽減、③参加者間の交流促進の工夫を考慮に入れる必要があると思われる。

6 まとめと今後の課題

本稿では、9年間のHELP!の実践概要および第5期から第16期までのアンケート結果とその考察、そしてHELP!の実践を通して得られたマッチングルールなどについて述べてきた。

アンケート結果からは、メンターおよびメンティーの双方にとって、HELP!の満足度が高いこと、そして、HELP!が英語教授経験や英語学習だけでなく、異文化理解や異文化交流にも効果があることが明らかとなった。

本稿の限界は、主にアンケートの回答結果を提示してきたため、量的なデータ分析のみとなっている点である。今後は、記述回答をまとめて、より具体的な事例を紹介しながら、HELP!の教育的効果の解明を進めたい。

最後に、今後のHELP!について述べる。HELP!は、2023年度末にプログラムを終了する予定である。その理由は、予算の減少に伴い、HELP!を継続することができなくなったためである。満足度が高いプログラムであり、「今後も続けてほしい」という参加者の

声が多い中でのプログラムの終了は大変残念である。

ただ、9年間のHELP!の実践で得られたことは、今後の留学交流教育に活かせると考えている。特に、マッチングの基準や、HELP!運営のノウハウは、今後引き継ぐべきであろう。また、メンターが、HELP!の経験から得たメンタリング英語教授法等を、これからのタンデム学習や英語学習サポートへ応用することが可能であると思われる。また、HELP!は、学外機関との協働により、英語教授法や英語学習法を重視したプログラムとして、メンター、メンティー双方の将来にとって有益であったとともに、大阪大学内の留学生と国内学生の交流を促進してきた貴重なプログラムであったといえる。今後は、HELP!の経験を活かしながら、より持続可能な言語学習・交流促進プログラムの開発に力を入れていきたい。

参考文献

- Brammerts, H., Kleppin, K. (2001). Selbstgesteuertes. Sprachenlernen im Tandem. Tübingen: Stauffenburg Verlag.
- 歳岡冨香 (2016a) 「留学生とのメンタリングによる英語学習支援の試み」『大阪大学高等教育研究』第4号 pp.87-91.
- 歳岡冨香 (2016b) 「大学内の異言語・異文化環境を活かした英語学習支援」『大学英語教育学会関西支部秋季大会』
- 中野遼子 (2016) 『ドイツにおける日本人交換留学生のネットワーク構築に関する研究』総頁数229 博士学位論文 大阪大学 (博士論文)
- 中野遼子・近藤佐知彦 (2019) 「留学生との英語学習プログラム“Project HELP!”の実践報告—アンケート結果の分析を中心に—」『多文化社会と留学生交流』第23号 大阪大学国際教育交流センター pp.35-41.